GENERAL INCORPORATED FOUNDATION BACH GROVE

バッハの森通信

第128号
2015年
7月20日発行

一般財団法人バッハの森
〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9　http://www.bach.or.jp
☎ 029-847-8696／Fax 029-847-8699　e-mail：info@bach.or.jp
郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

バッハを楽しむ秘訣

感動と好奇心と続けること

バッハの森を知らない方々に、バッハの森は何をしているところなのか、説明を繰り返す必要があるようです。目的も活動方法も、30年前の創立当初から変わっていないのですが、バッハの森が既成の組織の枠に入らないからでしょう。

バッハの森の目的は、バッハをはじめとするバロック時代の偉大な作曲家の作品を楽しむことです。そのために、現在、合唱の他に、オルガン、ハンドベル、クラヴィコード、チェンバロなどを学び、聖書を読みます。聖書を除けば、音楽学校のようですが、学校ではありません。入試も卒業もありませんから、いつでも誰でも参加できますし、いつでも止められます。カリキュラムもありませんから、何に参加するかは参加者個人が自由に決められます。

勿論、教会ではありません。聖書を読む目的は、バッハの音楽を理解するためです。日本では余り知られていないようですが、彼が作曲したほとんどすべての歌曲も、オルガン曲の大部分も、聖書に基づく歌詞につけられた音楽なのです。

＊　＊　＊

それにしても、合唱であれ、楽器の演奏であれ、楽しめるレベルまで音楽をするのは、決して易しいことではありません。まして、バッハは特に難しい音楽です。でもバッハの森のメンバーは、必ずしも音楽の専門家ではありません。少数の音大出身者の他は、大多数が音楽に関して一般人です。それでも、忍耐強い、優れた合唱指揮者、オルガニスト、音楽の教師たちと一緒に、皆でバッハを楽しんでいます。

難しいのは、音楽の技術的な問題だけではありません。バッハの音楽を学ぶためには、ドイツ語とラテン語の歌詞を理解しなければなりません。しかし、バッハの森のメンバーは一般日本人ですから、バッハの森に参加する前に、大学の第2外国語でドイツ語を学んだけれど忘れた、という人はいても、ラテン語を知っていた人はほとんどいません。それでも、バッハの森のメンバーは、いつの間にかドイツ語やラテン語の歌詞を理解して歌えるようになります。

もっと難しいのは聖書です。誰でも邦訳聖書を読めば、それなりに分かったような気になりますが、ちゃんと理解しようとすると難しい書物です。大体聖書特有の日本語があります。たとえば「義とする」の意味を理解できる人は少ないでしょう。特別な歴史と結び付いている人名が意味することを知るには、歴史を学ばざるをえません。そうしないと、アブラハム、え、誰？ということになります。

なお、バッハの森では、個人的にクリスチャンかどうかは全く問題にしないので、普段、忘れていますが、改めて数えてみると、教会に通っている人は、多分、参加者の四分の一ぐらいでしょうか。ただし、教会では、バッハを学ぶための聖書は教えていないので、結局、みんなと一緒に聖書を読み直す必要があるようです。

要するに、大変難しい音楽を、カリキュラムもない出入り自由な組織で、アマチュアが学んでいるわけです。それができるのは、聴衆に聴いてもらうために演奏技術を磨くプロを目指すのではなく、自分が楽しむために、音楽をしているからだと思います。1年に3回開くコンサートでも、参加してくださる方々を“聴衆”とは呼ばず、一緒に音楽を楽しんでくださる“会衆”と考え、“斉唱”に参加していただいています。

＊　＊　＊

こんなルーズな学び方で、バッハの難しい音楽を楽しめるようになるのは不思議なことですが、実際、この調子で30年も続けてきました。このようなことができる秘訣は何でしょうか。第一はバッハの音楽に感動する経験。次にバッハが何を言おうとしているのか興味を持つ好奇心。あとは続けることです。バッハは奥が深くて、いくら続けてもきりがありません。その奥深さが聖書に根差しているからなのですが、より分かり易く言うと、バッハを楽しむ私たちの活動が続く秘訣は、一番大切なものは「命」という価値観、明日はきっと良い日になるという楽観的な生き方、という、人生に対する二つの姿勢に由来すると言えます。皆さん、ご一緒にバッハを楽しみませんか。（石田友雄）

MEDITATIO／メディタツィオ／黙想

《バッハの森コンサート》

天の婚宴の招待状

命が命を生かす愛の連鎖

＊本稿は去る6月21日にバッハの森コンサートで朗読したメディタツィオです。

ヨーハン・フランク作詞、ヨーハン・クリューガー作曲のコラール：″Schmücke dich, o liebe Seele″「装え、おぉ愛する魂よ」により、バッハが作曲した同名のカンタータ(BWV 180)とオルガン曲(BWV 654)は、大変優美な音楽として広く愛好されてきました。本日は、この美しい音楽が伝える思いを巡り、特に″Schmücke dich″「装え」という歌い出しに籠められた幾重にも重なる意味を探り求めて、より深い感動を皆様と分かち合いたいと願っております。

王子の婚宴

出発点は、ナザレのイェスが語った「天の王国のたとえ」です（マタイによる福音書22章1～14節)。「天の王国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている」と、イェスは語り出します。「王子の婚宴」は、王子の婚礼を祝う披露宴ですが、単なる祝賀会ではありません。王家が子孫を得ることは、世襲権力である王権の維持と継承のために必須条件でした。従って、王子の婚宴に出席することは、その王家の支配の永続を願うことに他なりません。王は先ず有力者たちを王子の婚宴に招待しましたが、それまで王の支配に服従してきた人々が、全員、王の招待を断り、遂には王の使者を殺す者まで現われました。反乱が起きたのです。勿論、王は軍隊を送って反乱を鎮圧しました。

そこで、有力者たちを見限った王は、町の大通りにたむろしている貧民を、誰でもいいから連れて来て宴会場を満席にしろ、と家来に命じました。その結果、生まれも身分も無関係に集められた人々で、宴席はいっぱいになりました。ただし、彼らに要求された条件が一つだけありました。入り口で支給される礼服を着ることです。ところが、宴会場に入って行った王は、礼服を着ていない者が一人いるのを見つけました。「何で礼服を着ないでここに入って来たのか」と尋ねても、その男は黙っていました。怒った王は、「こいつを縛って宴会場から放り出せ」と家来に命じた、というお話しです。この意味深長なたとえで、イェスは何を語ろうとしたのでしょうか。

飢えた人たち

先ず、王が、天の王国の王、すなわち、神であることは間違いありません。次に、王子の婚宴に招待されていた有力者たちとは、この世の支配階級でしょう。彼らが王子の婚宴の招待を断り、反乱を起こしたのは、自分たちの特権を守るために、天の王の正義の支配が続くことを、望まなかったからです。他方、町の大通りにたむろしていた人々とは、搾取と圧政に苦しんでいた貧民でしょう。生まれも能力も問われず招待されると、思いがけない幸運が転がり込んできたと思ったに違いありません。喜んで王子の婚宴にはせ参じました。飢えていたからです。

このように誰でも招待した天の王が、与えた礼服の着用だけは義務付けました。これは、天の宴会に出席するためには、この世の衣服とは違う天の衣服が必要だ、ということを意味しています。天の衣服とは何でしょうか。言い換えれば、天の倫理です。例えば、山上の説教に集められたイェスの教えです。「敵を愛せ」、「天の父が憐れみ深いように、お前たちも憐れみ深い者になれ」等々、この世の倫理とはかけ離れた教えばかりです。そのような窮屈な礼服はご免だ、と着用を拒否する者が出ても不思議ではありません。しかし、そのような贅沢を言う者は、本当に飢えていなかったのではないか。飢えと渇きで死にそうなら、ともかく与えられた礼服を着て宴会のご馳走に飛びついたはずだと、イェスは言っているようです。

聖晩餐と天の婚礼

このように、イェスのたとえを読んでみると、コラール：「装え、おぉ愛する魂よ」の「装え」という言葉が、天の王子の婚宴に出席するために与えられた礼服を着用せよ、という意味であって、美しい衣装で着飾れ、という勧めではないことが分かります。その上で、イェスのたとえには語られていないのに、コラールが伝える天の婚宴のご馳走について考えてみましょう。

コラール第3節は「主の血の杯(ｻｶｽﾞｷ)とマナ(＝天のパン）に価いする宝石はない」と歌い、第4節は「私はいかに飢えて主の慈しみを慕い求めることか。／しばしば涙して、主の食べ物を憧れ求めることか。／私はいかに渇いて命の君の飲み物を求めることか・・・」と続けます。これらの言葉から明らかなように、天の王子の婚宴のご馳走は「聖晩餐」です。言うまでもなく、これは、最後の晩餐で、イェス・キリストが弟子たちに、「これは私の体である」と言って裂き与えたパン、「これは私の血であ

る」と言って与えた葡萄酒の杯を想い出す、礼拝のクライマックスとして守られてきた儀式です。パウロは、その意味を理解してそれを受けるに「ふさわしい」者としてパンを食べ、杯を飲め。そうしなければ裁きを受けると教えました。ここでコラールは、「聖晩餐」を受けるのに相応しい者になるよう「装え」と勧めているのです。

しかし、コラールの追加はこれで終わりません。イェスのたとえは、婚宴のことしか語りませんが、婚宴に先立って執り行われた王子の婚礼も、コラールの重要なテーマになります。初代教会以来、天に昇ったイェス・キリストが花婿として、信徒を花嫁に娶る天の婚礼の幻が伝えられてきました。「小羊（＝天のキリスト）の婚礼の日が来て、花嫁は用意を整え、輝く清い麻の衣を着せられた」とヨハネの黙示録はそのイメージと描きます（19 章 7〜8 節）。この伝承に基づき、コラールは、信徒の魂を、キリストに愛された花嫁の姿と重ねます。こうなると、「装え」という言葉は、もはや礼服着用の命令でも、聖晩餐を受けるに相応しい者になれという勧めでもなく、キリストの花嫁になる準備をする魂に向かって、天の婚礼のために清い衣をまとえ、とうながしていることになります。間違いなく最も華やかなで輝かしい光景です。

愛が生み出す命の連鎖

コラールの原点であるイェスのたとえのテーマは、神（＝イェス・キリスト）と人間の関係を示すことです。それによると、人間は皆、誰でも天の婚宴に招待されています。しかし、その招待を受けるか受けないか、婚宴の席で礼服を着るか着ないかは、個々人が決めることで、天の王は無理強いしません。ただし、招待を断った人も、礼服の着用を拒否した人も、天の婚宴に出席できません。天の王の支配を受け入れることが、婚宴出席の絶対条件だからです。

それにしても、有力者全員に出席を拒否された天の王が、誰でもいいから連れてきて婚宴の会場を満席にしろ、と家来に命じたのはなぜでしょうか。それは、一人でも多くの人を天の婚宴に招きたい、という天の王の本心の表れです。要するに、天の王は人間を愛している、というのが、イェスの語りたかったことだと思います。

そこで、コラールは、キリストの肉と血が婚宴のご馳走、信徒の魂がキリストの花嫁、という表現を追加して、更にはっきりと神の愛を語るのです。そして、究極の愛の実現として、自分の中に神を迎え、神と一つになることを願います。これは「神秘的合一」と呼ばれる宗教的願望ですが、昔の人のように神秘的でも宗教的でもない私たち現代人には、客観的な説明がないと分かり難い願望です。

キーワードは「愛」です。「愛」とは命と命が関わって相手を「生かす」関係です。「私の肉を食べ、その血を飲まなければ、お前たちのうちに命はない」とイェス・キリストは語りました（ヨハネによる福音書 6 章 53 節）。それだけ聞くとショッキングな言葉ですが、自然界の食物連鎖と比較すれば、ごく当たり前のことが語られているのです。

すべての生き物は、他の命を食べて自分の命を維持しています。私たちが食物を食べて生きる行為は、他の命と自分の命の合一に他なりません。昔から、人間はそのことに気付いてきました。ですから、食事に際して感謝する習慣が、古来、すべての文化にありました。食べ物になってくれた動植物の命に、その「愛」に感謝するためです。ところが、傲慢になった人間は、弱肉強食という、他の命の強奪を始めました。そこには「愛」も感謝もありません。自然界は、本来、すべての種が生存できる、バランスのとれた食物連鎖によって成り立っているのです。

愛の衣

自然界の営みに由来するもう一つの合一が、キリストを花婿、信徒の魂をその花嫁にたとえ、両者の合一を至福の関係とみなす伝承です。二つの命が関わって新しい命を生み出す、「愛」によって結ばれた命と命の合一については、説明する必要がないでしょう。ただ、キリストと魂の合一から生まれる新しい命とは何でしょうか。そのことについてコラールははっきり語りませんが、最後に、「今、地上で招待されたように、天においても客となれますように」と願います。この言葉から、天の王子の婚宴に招待された魂が、今、すでに地上で天の婚宴に出席している様子がうかがえます。このとき、天は地上に来ているのです。換言すれば、天の王の御意志(ミココロ)が、天におけるように、すでに地上で実現しているのです。これがこの合一から生れた新しい命、新しい状況だ、と言っているのではないでしょうか。

以上の考察から、"Schmücke dich"「装え」というコラールの歌い出しの言葉に、少なくとも三つの意味が籠められていることが分かります。先ず、天の王子の婚宴に出席するために礼服を着用せよという命令。次に、花婿イェス・キリストと婚礼する準備をしている花嫁の魂に、清い衣を身につけよ、という勧め。最後に、神との合一を願う魂に、愛の衣をまとえという教えです。

ここまで、コラールに籠められた思いを言葉で学んできましたが、ここからは、言葉では言い表せない思いを伝える音楽を通して、皆様と感動を分かち合いたいと願っております。（石田友雄）

歴史的感動に参加する楽しみ

メサイアを2倍楽しむワークショップ

「メサイア」全曲を、バッハの森で初めて学んだのは、20代前半だった。極めて明るく美しい音楽の中で、「メシアとは何者か」という重いテーマを突き詰めていく展開に息を呑み、最終曲のアーメン・コーラスでは、人目をはばからず号泣していた。人は何のために生きるのだろう、と真剣に考える堅物であった私は、メシアがこの世の苦しみと悲しみを一身に背負って、十字架の犠牲になった生き様を描く音楽に、言葉では言い尽くせぬほどの感動を覚えたのだ。

あれから10数年、人生における経験値をわずかばかり積んできたが、それと引き替えに、真っ直ぐに尖っていた感受性のアンテナは大分鈍くなった。このような今の私に、「メサイア」はどのように語りかけてくるのか。今回はオルガンと一緒に歌えるという。学んで、（ＣＤを）聴いて、歌う「メサイアを２倍楽しむワークショップ」に、懐かしさと好奇心を胸に参加した。

壮大な歴史を歌う感動的な音楽

「メサイア」のテキストは、18世紀に生きたチャールズ・ジェネンズという人が書いたのだが、徹頭徹尾、聖書の引用で構成されている。引用個所は、旧・新約聖書を縦横にまたぎ、巧みにメシアの姿を説明していく。このテキストを理解するためには、古代オリエントの大まかな地理が頭に入っていないといけないし、1500年にわたる古代イスラエル史の流れの中で、神が神の民イスラエルと結んだ４つの契約　ー　アブラハム契約、シナイ契約、ダビデ契約、そして新しい契約　ー　を整理して把握しなければならないから大変だ。ナビゲーターは、こうした大前提となる情報を短くまとめた後、時空をはるかに飛び越えた聖書の世界へ私たちを誘っていった。

第１曲のシンフォニアは、長い苦難に耐えて来た人々に救いの兆しが現われ、メシアの登場を予感させるような序曲である。続いて“Comfort ye, comfort ye, my people, saith your God”「慰めよ、お前たち、慰めよ、お前たちと、お前たちの神は言われる」と有名なレチタティーヴォをテノールが歌い出す。ここで、「慰めよ、お前たち」と「お前たちの神」の「お前たち」が違う人々を指しているということは、説明がないと分からない。最初の「お前たち」は、天の王に仕える家来たち、すなわち天使たちであり、二番目の「お前たち」は、紀元前６世紀にバビロンに捕囚されていたイスラエルの民である。

神の怒りがとけ、捕囚から解放してくださる、という慰めの言葉を語った預言者の思いをなぞりながら、オルガンに助けられて、それぞれが口ずさんでみた。この個所を初代キリスト教徒は、ナザレのイェスの姿に重ねて、悪魔から人間を解放するメシア（キリスト）の出現の予告と解釈した。高揚した彼らの思いがいかばかりだったか、ということも考えながら、美しい慰めに満ちた旋律に引き込まれた。

第1場面の結びである第４曲：“And the glory, the glory of the Lord”「こうして主の栄光が必ず現され、すべての肉なる者は共にそれを見るであろう」は、現わされた神の栄光を示す威厳とそれを仰ぐ人々の喜びを同時に表す、力強い明るい合唱曲である。時間が足りなくなって１回しか歌えなかったのが少々残念だったが、心楽しく歌い終わることができた。

重層的なキリスト教文化の蓄積

「メサイア」はオラトリオ（音楽劇）である。今回学んだ第１曲から第４曲の登場者は、神、預言者、イスラエルの民など、決して多くないが、それぞれの状況を具体的に、目に見えるように描く印象的な音楽とともに、場面がどんどん展開していく。一部とはいえ、声を出して自分でこの音楽を歌ってみることにより、否応なしに観客席からステージに上げられた気分になる。時には神、時には預言者、時にはイスラエルの民になって、彼らの思いを表現する出演者になるのだ。

このような学び方をして初めて味わえる面白さの醍醐味は、ひとつの場面の中に重層的なキリスト教文化の蓄積を見ることである。旧約時代の預言者、それを用いてメシア、すなわちキリストとは誰かを説明した初代キリスト教徒が纏めた新約聖書、旧・新約聖書によって巧みにメシア像を描いたジェネンズ、それに感動的な音楽をつけたヘンデル、というように、長い伝統を継承しつつ新たな境地を創造した彼らのエネルギーに思いをはせ、その文化のリレーに参加できる刺激的な時間だった。

このワークショップは、ナビゲーター（石田友雄）合唱指導（比留間恵）、オルガン伴奏（鈴木由帆）の皆さんにより、数ヶ月に１回の不定期な研究会として始まった。感動的なアーメン・コーラスまで到達、完結するのは、数年先のことだろうか。それまで感動を共有する仲間の参加が続き、更に増えることを願うと共に先ず第２回を期待している。

（別所香苗）

＊　　＊　　＊

バッハの森の魅力に捕まり

育メンパパの悩ましい選択

私がバッハの森に参加したのは 2002 年、大学1年のときですから、今年で 14 年目になります。6月のバッハの森コンサートでは、しばらく“育休”していたハンドベルに復帰して、ブランクでなまった感

覚を取り戻すのに必死でした。合唱練習も 2 人の子どもを連れてきたので夫婦交互の参加となり、指揮者の比留間恵さんとメンバーの皆さんにに大変ご迷惑をかけたことを、感謝とともにお詫びします。

思い返すと、この14年間で自分の置かれた環境は大きく変わりました。大学生から社会人となり、結婚して 2 人の子どもが生まれました。学生の頃に比べると流石に忙しくなり、合唱とハンドベルの練習に参加するため、どうやって週末、バッハの森に行くかが、毎週後半の家族の議題になっています。子どもの行事や家事など、週末にやるべきことが沢山あって、これらの用事とバッハの森に参加することを両立させることは、ときに大変困難なことがあるからです。（聞くところによると、これは皆さんが、多かれ少なかれ抱えておられる問題のようですね）。

楽しい、贅沢な場所

ところで、メンバーの皆さんは、バッハの森をどのように“評価”なさっているのでしょうか。ここでいう“評価”とは、社会的評価のことではなく、自分の中でどのような価値とか意味を持っているのか、という意味です。合唱、オルガン、聖書など、バッハの森に参加する理由は人それぞれでしょう。そもそもバッハの森は、「来る者、拒まず、去る者、追わず」という自由なところなので、いろんな目的の皆さんが集まっていても不思議ではありません。

私にとってバッハの森は、大好きなルネサンス・バロックの合唱曲を、個性的な指揮者と、これまた個性的なメンバーと一緒に歌うことができる場であり、素晴らしいパイプオルガンを最高の音響と雰囲気を持つ奏楽堂で聴くことができる場であり、超専門的な内容を一般常識風に解説してくださる石田友雄先生のもと、歌詞の原語を学び、聖書や歴史的背景から歌詞を解釈する知的興奮を味わえる場であり、そこに集うメンバーたちと真面目な議論から冗談交じりの雑談まで、コミュニケーションを楽しむ場、といったところでしょうか。

他にいろいろな団体を知っているわけではありませんが、音楽についても聖書や歴史についても、興味はあるけれど全く素人の私のような者が、このような素晴らしい環境で学べる場所は、そうそう他にはないだろうと思います。でも、いろいろもっともらしい理由を考えてみましたが、つまるところ“楽しい”と感じることが、バッハの森に参加する単純な、しかし最も大切な動機であり、自分の満足を得るための“贅沢”だと気がつきました。

しかし、多くのやりたいことと、沢山のすべきことがある中で、することに優先順位をつけると、時にはやりたいことを諦めなければならないことがあります。バッハの森に“参加したい”という思いとその他の用事を天秤にかけ、理性的に“評価する”必要に迫られます。たとえ参加しても、子守にかまけて満足に練習できないこともありますし、子どもが騒いで練習を妨害するリスクも考慮しなければなりません。参加するか／しないか、いろいろ考えては、“参加する”方を選択することが多いのですが、この選択には当面悩ましい状態が続きそうです。

バッハの森の魅力をもっと発信しよう

最近、私はバッハの森の広報活動をお手伝いしていますが、無理をしても“参加したい”と思わせる「バッハの森の魅力」を、もっと活発に発信していく必要があると痛感しています。バッハの森の素晴らしい活動を、もっと多くの方々に知っていただき、参加していただいて、バッハの森以外ではなかなか経験することができない感動を共有できたら、どんなに素晴らしいことかと思います。ただ、どうやって発信するかということについては、先日の有志懇談会でも話題になりましたが、まだこれからいろいろと試行錯誤していくことが必要なようです。「バッハの森の魅力」は、人によって違いますから、各人ぞれぞれ持ち寄って多面的な形で発信することが理想だと思います。是非、ご意見やアイディアをお寄せください。

なお、ここ数年は子育てに伴って、満足に活動に参加できず、特にクワイアとハンドベルの皆様には大変ご迷惑をかけております。子連れ参加を温かく支援してくださるお陰で、何とかバッハの森を続けられております。この先も、この状態がしばらくは続きそうですが、一家 4 名、今後とも宜しくお願いいたします。（別所直樹）

＊　　＊　　＊

変化を起こす試み

第 4 回・バッハの森の運営を考える有志懇談会

6月20日に開いた 4 回目の「バッハの森の運営を考える有志懇談会」には、17 名の参加者がありました。翌日のコンサートのゲネプロを控えた多忙な時間帯でしたが、バッハの森に比較的最近参加した方々も来てくださり、現状や今後のプログラムについて活発な話し合いができました。

決算報告後に、新会員がなかなか増えない現状を打開するためには、新しいニーズを開拓することが必要なのではないかという提案がなされました。こうした観点から、変化を起こす試みとして、すでに不定期の研究会「メサイアを 2 倍楽しむワークショップ」が始まりましたが、8 月23日には「夏休みの音楽ワークショップ」が開かれます。「家族で楽しむ音楽会」を見直し、午前中は合唱とハンドベル、午後はオルガンとチェンバロを試奏する「音楽教室」という2 部制です。果たして、どのくらい参加者があるか、経済的に成り立つか、何よりも、充実した内容になるかどうか、皆で協力し、見守っています。

懇談会の話し合いの中から運営上のヒントが生まれます。運営にも更に多くのメンバーのご参加を願っております。（戸部慶子）

STATISTICS ／スタティスティクス／統計

2014年度 ・統　計

会員数（2015. 3. 31 現在）

維持会員	86人
賛助会員	41人
計	127人

入退会者数（2014 年度）

	入会	退会	増減
維持会員	11	10	+1
賛助会員	0	4	- 4
計	11	14	- 3

集会回数 参加者延べ人数（2014. 4. 1～2015. 3. 31）

学習コース	回数	延べ数
クワイア（混声合唱）	33	480
バロック・アンサンブル	14	48
ハンドベル・クワイア	24	67
オルガン音楽研究会	16	130
コラール研究会	16	114
クラヴィコード・オルガン教室	15	51
オルガン・クラブ	11	28
チェンバロ教室	2	4
入門講座：聖書を読む	30	220
オルガン・クラヴィコード・チェンバロ練習	439	439
チェンバロ調整講習会	2	12
特別練習	2	13
クリスマス祝会	1	21
小計	604	1627
公開プログラム		
コラール・カンタータ研究	14	161
コラールとカンタータ	16	194
コンサート	6	222
ワークショップ	2(5日)	65
家族ワークショップ	2	24
子どもクリスマス	1	41
音楽会（家族で楽しむ）	2	46
小計	43(5日)	753
運営活動		
運営委員会	47	182
理事会	2	9
評議員会	1	6
有志懇談会	1	9
クリスマス飾り付け	1	6
オルガン調律	2	4
小計	54	216
その他		
宮本オルガン教室セミナー	1	10
特別オルガン教室（フェリス）	3	6
特別音楽講習会（フェリス）	1	2
放送(NHK)	1	
見学	1	46
来訪	8	9
小計	15	73
総計	716回	2669人

会計報告（2014. 4. 1～2015. 3. 31）

経常収支　　単位：千円

収入の部	
基本財産受取利息	1
特定財産受取利息	0
年会費（維持・賛助会費）	953
事業収益	
1) 研究会（学習コース）	1,763
2) 公開講座	129
3) コンサート	360
4) ワークショップ	207
5) 他団体向けセミナー	112
6) 音楽教室	164
7) 楽器使用料	311
8) 賃料収益（家賃収入）	1,152
一般寄付金	547
雑収益（管理棟家賃,コピー代,楽器使用料）	750
計	6,449

支出の部（建物維持、オルガン修復を除く）	
給与手当	944
法定福利費	0
支払報酬（会計事務所）	160
旅費交通費	296
通信運搬費（郵送料、電話、ネット関係）	177
什器備品費	15
消耗品費（コピー用紙、文具他）	102
修繕費（楽器メンテ、植栽）	720
印刷製本費（バッハの森通信、封筒印刷）	139
光熱水料費	898
賃借費（地代、機器リース料）	1,158
火災保険料	123
諸謝金	982
租税公課（固定資産税、法人事業税）	417
負担金（振込手数料）	3
広告費	0
雑費（コピー使用料、クリーニング代）	113
計	6,247
当期経常増減額	202

指定寄付収支　　単位：千円

収入の部		**支出の部**	
土地地上権積立			
前期繰越	937		
寄付	2		
利息	0	繰越	939
計	939		939

建物維持・修理

前期繰越	637	建物修理	214
寄付	510	（奏楽堂、デッキ）	
利息	0	繰越	933
計	1,147		1,147

オルガン修復

前期繰越	2,318	オルガン修繕	1,546
寄付	20	繰越	792
計	2,338		2,338

借入金（2015. 3. 31 現在）　単位：千円

長期借入金	34,000
短期借入金（建物維持）	5,330
短期借入金（新法人移行他）	1,700
計	41,030

＊　＊　＊

運営の問題点と解決のヒント

2014年度決算報告をめぐって

昨年、2013 年度の決算報告では、かなり危機的なバッハの森の現状をお伝えしました。ここ 10 数年の流れから見ると、プログラムの内容や演奏の質が向上しているにもかかわらず、コンサートや研究会の参加者数が伸び悩んでいるのが現状です。この状況の打破を目指して、昨年の年末には、例年の構成を大きく変え、5 回シリーズの「バッハの森のクリスマス」を開きました。どのコンサートも約 30 名の有料入場者があり、コンサート収入の増加だけではなく、バッハの森の活性化のためにも有益でしたが、他方、謝礼や交通費、光熱費が増加しましたから、この程度のコンサート収入だけでは、実質的な収益にはほとんど結びつきませんでした。

とはいえ、2014 年度のバッハの森は「経常収支」としては堅実な数字を示しています。すなわち、ランニングコストは収支とんとんでした。しかし、これでは、建物の維持や土地地上権などのための長期的な視野に立った積立が出来ず、たとえ少額ずつでも返済すべき累積借入金の返済もできません。

2013 年度の「赤字」76 万円は、ほとんど一般財団法人に移行するためにかかった特別経費でした。この赤字を、再び理事長から無利子・無期限の借り入れをして補填したので、累積借入金は 4,100 万円を越えました。

ですから、2014 年度の決算で、「経常収支」が 20 万円の黒字になったと言っても、黒字の実感が乏しいのです。例えば、寄付収入だけで成り立っている「特別会計」に「経常収支」から回す余裕がありません。しかし、毎年、少なくとも隔年で廻すべき 6 棟の建物の外壁塗装は待っていてくれません。実際、数年延ばしにしてきた聖書の国資料館の外壁塗装は、これ以上延ばせない状態になっていたので、2015 年度の予算で、約 200 万円の塗装工事を行ってしまいました。その結果、上記の会計報告では、1,147,000 円ある建物修理・維持会計が、現在は約 100 万円の赤字になっています。これでは、来年、他の建物の外壁塗装は難しく、9 年後と 11年後の土地地上権更新に必要な積立も実現しそうにありません。

こうした実情に広く関心を持っていただくために、毎年 6 月に「バッハの森の運営を考える有志懇談会」を開いてきました。ここでは会計報告と会計に関する質疑だけではなく、バッハの森の運営に役立つことならどんな提言でも歓迎してきました。例えば、安い印刷屋を知っているとか、チラシを置いてくれるお店を紹介できるというようなことでもいいのです。皆さんが運営にも協力してくださることにより、バッハの森は本当の意味で活性化すると思います。もうひとつお願いがあります。コンサートや研究会への参加人数が減少しています。当然、魅力的なプログラムを作ることが大切なのですが、そのことについては、アクティヴ・メンバーの皆さんが一所懸命努力しています。会員の皆さんが、よりしげく参加してくださるだけではなく、ご友人、お知り合いをさそって、バッハの森だけで味わえる豊かな時間を、より多くの方々と共有する喜びにより、バッハの森を応援してくださるようお願いします。

（戸部慶子）

日　誌（2015. 4. 1～7. 11）

4. 2, 9, 16, 23　**運営委員会**　参加者各 4 名。
4. 10　**初夏のシーズン開始**
4. 30　**運営委員会**　参加者 5 名、草取り。
4. 29　**メサイアを 2 倍楽しむ会**　参加者 21 名。
5. 1, 2, 6, 7, 10, 11～14, 17～20　**外壁塗装**（資料館）。
5. 3～5　**教会音楽ワークショップ**　参加者 セミナー：10 名、16 名。合唱：11 名、15 名、14 名。ハンドベル：4 名。オルガン：12 名。まとめ：15 名。
5. 7, 14, 21, 28　**運営委員会**　参加者各 4 名。
5. 28　**打ち合わせ**　菊地健太氏（TOMA グループ）。
6. 4　**クラヴィコード返送**　キース・ヒル楽器工房へ。
6. 4, 11, 18, 25　**運営委員会**　参加者 4 名、3 名、4 名、4 名。
6. 19　**オルガン調律**　河内克彦氏。
6. 20　**バッハの森の運営を考える有志懇談会**　参加者 17 名。
一般財団法人バッハの森評議員会　参加者 8 名。
一般財団法人バッハの森理事会　参加者 4 名。
6. 21　**バッハの森コンサート**　参加者 57 名。
6. 22～9. 10　**夏期休館**
6. 28　**特別音楽講習会**（フェリス女学院大学音楽部）
7. 2, 9　**運営委員会**　参加者 3 名、4 名。

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

コラール・カンタータ研究
コラールとカンタータ（JSB）

4. 11　復活祭第 1 祝日のカンタータ「天は笑う！地は歓呼し」（BWV 31）；コラール「わが終わり迫り」。オルガン：J. S. バッハ「こうして私はイエス・キリストのところへ向い」（BWV 31／9）、當眞容子。参加者 12 名。
4. 18　第 386 回、オルガン：J. M. バッハ「わが終わり迫り」當眞容子。参加者 13 名。
4. 25　第 387 回、ミゼリコルディアス・ドミニのカンタータ「私は良い羊飼いである」（BWV 85）；コラール「主はわが飼い主」、「御神はわが盾」。オルガン：J. S. バッハ「いと高くいます御神にのみ栄光あれ」（BWV 677）、笠間きよ子。参加者12名。
5. 9　ロガーテのカンタータ「これまでお前たちは何も祈り求めたことがない、私の名で」（BWV 87）；コラール「幸いなり」。オルガン：J. S. バッハ「私は悲しんでいていいのか」（BWV 87／7）、金谷尚美。参加者 12 名。
5. 16　第 388 回、オルガン：J. S. バッハ「イエスよ、私の喜びよ」（BWV 610）、金谷尚美。参加者 14 名。
5. 23　聖霊降臨祭第 1 祝日のカンタータ「響きわたれ、お前たち歌よ、鳴り響け、お前たち弦よ」（BWV172）；コラール「いかに麗しく、光り輝くや」。オルガン：J. S. バッハ「御神より喜びの輝きが私に来ます」（BWV 172／6）、安西文子。参加者 9 名。
5. 30　第 389 回、オルガン：D. ブクステフーデ「いかに麗しく、光り輝くや」（BuxWV 223）、安西文子。参加者 12 名。
6. 6　三位一体後第 1 主日のカンタータ「貧しい人々は食べて満ち足りるであろう」（BWV 75）；コラール「御神の御業はことごとく善し」。オルガン：J. S. バッハ「神がなさること、それは善くしてくださることなのです」（BWV 144／3）、鈴木由帆。参加者 12 名。
6. 13　第 390 回、オルガン：J. L. クレプス「神がなさること、それは善くしてくださることなのです」、鈴木由帆。参加者 11 名。

学習コース

バッハの森・クワイア（混声合唱） 4. 11／17 名、4. 18／13 名、4. 25／17 名、5. 9／15 名、5. 16／14 名、5. 23／17 名、5. 30／14 名、6. 6／18 名、6. 13／ 20 名、6. 20／22 名（ゲネプロ）。

バッハの森・バロック・アンサンブル　5. 16／3 名。

バッハの森・ハンドベル・クワイア　4. 18／3 名、5. 16 ／4 名、5. 30／4 名、6. 13／4 名、6. 20／4 名。

通奏低音研究会　5. 16／6 名、6. 13／6 名。

オルガン音楽研究会　4. 24／9 名、5. 8／10 名、5. 22／10 名、6. 5／8 名。

コラール研究会 4. 10／6 名、4. 24／8 名、5. 8／8 名、5. 22／8 名、6. 5／8 名、6. 19／10 名。

クラヴィコード・オルガン教室　4. 24／4 名、5. 8／5 名、5. 22／2 名、6. 5／8 名、6. 19／4 名。

オルガン・クラブ　4. 10／3 名、4. 17／3 名、5. 15／2 名、5. 29／2 名、6. 12／2 名。

チェンバロ教室　5. 22／2 名、

読書会：聖書　4. 11／8 名、4. 18 ／9 名、4. 25／9 名、5. 9／8 名、5. 16／6 名、5. 23／5 名、5. 30／8 名、6. 6／7 名、6. 13／8 名。

オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習
4. 1／1 名、4. 2／1 名、4. 3／3 名、4. 8 ／2 名、4. 9／2 名、4. 10／1 名、4. 11 ／2 名、4. 14／1 名、4. 15／2 名、4. 16 ／2 名、4. 17／2 名、4. 18／1 名、4. 21 ／3 名、4. 22 ／2 名、4. 23／3 名、4. 25／3 名、4. 28／3 名、4. 30 ／3 名、5. 1／1 名、5. 2／1 名、5. 7／2 名、5. 8／1 名、5. 9／2 名、5. 12／3 名、5. 13／2 名、5. 14 ／ 2 名、5. 15／3 名、5. 19／3名、5. 20／1名、5. 21 ／ 2 名、5. 22／1 名、5. 23／1 名、5. 26／3 名、5. 27／1 名、5. 28／3 名、5. 29 ／3 名、5. 30／2 名、6. 2／2 名、6. 3 ／2 名、6. 4／1 名、6. 5 ／1 名、6. 6／2 名、6. 9／3 名、6. 10 ／1 名、6. 12／2 名、6. 13／1 名、6.14／1 名、6. 15／1 名、6. 16／4名、6. 17／2名、6. 18／2 名、6. 19／1 名、6. 20／1 名、6. 23 ／1 名、6. 24／1 名、6. 25 ／1 名、6. 26 ／1 名、6. 30／3 名、7. 1／1 名、7. 2／1 名、7. 3 ／3 名、7. 7／3 名、7. 8／1 名、7. 10／2 名。